

10 今後の方針

今回の報告書は、調査結果を多くの方にわかりやすく伝えることを主眼に作成した。今後はさらに、次の手順で成果を取りまとめ、がん患者の「生きることの質（QOL）」の向上に役立つ事業展開に結び付けていく。

（1）「がんの悩みデータベース」

現時点では、自由記載のまま電子情報化したデータとして存在している二万数千件のがん患者の悩みや負担を、内容的に類似したものをまとめた上で、補遺 3 に示すような数十文字の短文とし、分析が容易なデータベースとして完成させる。

（2）「がんの悩みデータベース」に基づく「がんの種類別悩みデータベース」

体験者の悩みや負担は、「がん」という疾病に共通したものも多いが、7章(2)「がんの種類別」（24 ページ）に示したとおり、がんの種類により大きく異なる項目もある。そこで、がんの悩みデータベースから、同じがんについての悩みを選択した「がんの種類別悩みデータベース」を作成する。

これにより、患者と家族は、同じがんに向き合った人々がどのような悩みや負担を持っているのかを知ることができる。「対応策・支援策・支援ツールへの要望」として、多くのがん体験者が自分と同部位の人の体験談や助言を望んでいることから、先人のがんと闘いの細かい記録を伝えることの重要性が認識できる。

また、がんの種類別データベースは、各診療科の医療者にとっても今後の患者とのコミュニケーションの改善やより高度なケアの実践のため役立つものと期待できる。

（3）「よろず相談データベース」との比較

「がんの悩みデータベース」と静岡がんセンターよろず相談にて作成されつつある「よろず相談データベース」との乖離について分析を試みることで、医療機関において、がん患者が「相談する悩み」と、アンケート調査で明らかにされた「相談しない悩み」とを把握し、がん患者が求める心のケアに生かす。

（4）がんの悩み Q&A 集の作成、公開

「がんの悩みデータベース」に基づき、医療者、患者会・患者支援団体、行政等が協働して、具体的な悩みの解決方法を探り、各々の悩みに対応した改善策を付した Q&A 集の形にまとめ、冊子やインターネット上へ公開する。これにより、がんと向き合う人々の孤独感を減らし、悩みの軽減に役立てる。

(5) 社会の理解

これらのデータベースを広く社会に向けて公開し、社会全体ががん患者や家族の悩みや負担を理解するのに役立つ。また、患者のニーズに答えるがん患者支援のためのシステム整備や新しい医療用具・ソフトウェア等の開発を進める基礎とする。さらに、「がんは不治の病」など、誤ったイメージを変えるよう努力する。